

復刻

良寛と真心

相馬御風著

相馬御風著

良寛と貞心

付「良寛と貞心尼の遺稿」

復刻 良寛と貞心

一九九一年十一月四日発行

著者 相馬御風

発行者 中村昭三

〒九五〇 柏崎市西本町三丁目二一二

発行所 (株)考古堂書店

〒五三二 新潟市古町通四番町五六三

☎(〇二五)二二九一四〇五〇

印刷所 (株)第一印刷所

〒五〇〇 新潟市和合町二丁目二

☎(〇二五)二八五一七一六一

ISBN4-87499-173-4 C0023

緒言

○本書は、良寛和尚最愛の弟子貞心尼の生涯及び兩者の世にも稀な美しい交遊を叙した文章と、貞心尼の良寛和尚について書き遺した文獻及び彼女の歌集を収めた。

○貞心尼の遺稿「蓮の露」は、良寛和尚を研究する上に最も貴重な文獻の一であり、貞心尼自筆の歌集「もしほぐさ」は近年發見されたもので、貞心尼歌稿の最もよく纏つた、内容の最も豊富なものの一である。

○良寛和尚の最後の、そして最愛の弟子であつた貞心尼を通して良寛和尚を知る爲にも、貞心尼その人の生涯と藝術を知る上にも、本書はこれまでに公にされたどの書物よりも完備に近いものであると信ずる。

良寛と貞心〈復刻〉

相馬御風

一

良寛和尚の愛弟子貞心尼

三

貞心尼雑考

四八

芭蕉と壽貞尼、良寛と貞心尼

五七

〔はちすの露ほか写真〕

七三

貞心尼全集〈復刻〉

相馬御風

一一七

はちすの露

一一九

焼野の一章

一六六

良寛の遺稿刊行に関する書翰二通

一七四

〔もしほ草、貞心尼短冊ほか写真〕

一八五

良寛と貞心尼の遺稿〈復刻〉

堀 桃 坡 一九三

緒 言 一九五

もしほ草 二〇三

短歌補遺 三二三

孝室貞心尼年譜 三三九

貞心尼補説

渡 辺 秀 英 三五九

カンタータ 良寛と貞心

中 村 千 榮 子 三七一

あとがき

中 村 昭 三 三八七

良寛と貞心

相馬御風

良寛和尚の愛弟子貞心尼

一

古來男女の間に唱和された歌で廣く世に知られてゐるものは、無論少くない。しかし、今日までに私自ら讀んだものでは、萬葉集中の少數を除く外は、その表現の切實味を以て胸をうつやうな作には、あまり多く接することが出来なかつた。

ところが、はじめて良寛和尚の歌を讀み、その中に彼と彼の最愛の弟子貞心尼との間に唱和された五十餘首のあつたのに接した時、私はかくも淳真な、かくも切實な、かくも無礙な、かくも濶かな、そしてかくも清らかな男女間の愛の表現があり得るものかと驚嘆措く能はなかつた。

そも／＼この良寛・貞心唱和の歌は、良寛歿後、貞心尼が苦心蒐集した良寛歌集『蓮の露』

の終りに添へてあるものであつて、これほど數多く男女唱和の歌がひとまとめにしてある點でも、古來あまり多くその類を見ないところであらう。

それには尼貞心が僧良寛と初めて相識つてから、最後に良寛の死によつて永遠の別れを告げたままでの間に、兩者の間に詠みかはされた歌の大部分がしるされてゐる。そしてその歌集の序文のをはりに貞心尼自ら――

「こは師のおほんかたみと傍におき朝夕にとり見つつ、こしかたしのぶよすがにもとてなむ。」と云つてゐるやうに、もとくそれは彼女みづからの追憶の料としてしるし集めたものであつた。そこに此の集に對して一段のゆかしさを私達に覚えさせるものがある。

さて然らば、その良寛・貞心唱和の歌といふのはどんなものであらうか。先づこゝにその殆ど全部を掲げて置くことにする。

師常に乎毬をもて遊び玉ふときよて奉るとて

これぞ此のほとけの道に遊びつつ撞くやつきせぬみのりなるらむ

貞心

御かへし

つきて見よひふみよいむなやここのとをとをさめて又始まるを

良寛

はじめてあひ見奉りて

君にかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬ夢かと思ふ

貞心

御かへし

夢の世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそのまに／＼

良寛

いとねもごるなる道の物がたりに夜もふけぬれば

白たへのもで寒し秋の夜の月なか空にすみわたるかも

良寛

されどなほあかぬこちして

向ひゐて千代も八千代も見てしがな空行く月のこと問はずとも

貞心

御かへし

心さへ變らざりせばはふつたのたえず向はむ千代も八千代も

良寛

いざかへりなむとて

立ちかへりまたもとひこむ玉銚の道のしば草たどりくくに
又も來よ山のいほりをいとはずば薄尾花の露をわけく

貞心
良寛

ほどへてみせうそこたまはりけるなかに

君や忘る道やかくるこのごろは待てどくらせど音づれもなき

良寛

御かへしたてまつるとて

ことしげきむぐらのいほにとちられて身をば心にまかせざりけり

貞心

山のはの月はさやかにてらせどもまだはれやらぬ峯のうすぐも

貞心

こは人の庵に在し時なり

御かへし

身をすてて世を救ふ人もますものを草の庵にひまもとむとは

良寛

久方の月の光のきよければ照しぬきけりからもやまとも

良寛

昔も今もうそもまこともはれやらぬ峯の薄雲たちさりてのちの光と

おもはずや君

良寛

春の初つかたせうそこ春るとて

おのづから冬の日かすのくれゆけば待つともなきに春は來にけり
われも人もうそもまこともへだてなくてらしぬきける月のさやけさ
さめぬればやみも光もなかりけり夢路をてらす有明の月

貞心
貞心
貞心

御かへし

天が下にみつる玉よりこがねより春のはじめの君がおとづれ
手にさはるものこそなけれのりの道それがさながらそれにありせば

良寛
良寛
良寛

御かへし

春かぜに山のみ雪はとけぬれど岩まに淀む谷川の水

貞心

御かへし

み山べのみ雪とけなば谷川によどめる水はあらじとぞ思ふ

良寛

御かへし

いづこより春は來しぞとたづぬればこたへぬ花にうぐひすのなく

貞心

君なくば千たび百たび數ふとも十づゝ十をもゝとしらじを

貞心

御かへし

いざさらばわれもやみなむこゝのより十づゝ十をもゝと知りなば

良寛

いざさらばかへらむといふに

りやうぜんの釋迦のみ前に契りてしことな忘れそ世はへだつとも

良寛

りやうぜんの釋迦のみ前に契りてしことは忘れず世はへだつとも

貞心

聲韻のことを語り玉ひて

かりそめのこととなおもひそこのことば言の葉のみとおもほゆな君

良寛

いとま申すとて

いざさらばさきくてませよほととぎすしば鳴く頃はまたも來て見む

貞心

浮雲の身にしありせば時鳥しばなく頃はいづこに待たむ

良寛

秋萩の花さく頃は來て見ませいのちまたくば共にかささむ

良寛

されど其ほども待たず又とひ奉りて

秋萩の花咲くころを待ちとほみ夏草わけて又も來にけり

貞心

御かへし

秋萩のさくをとをみと夏草の露をわけくとし君はも

良寛

……中略……

ある時與板の里へわたらせ玉ふとて、友だちのもとより知らせたり
ければ急ぎまうでけるに、明日ははやこと方へわたり玉ふよし、人
人なごりをしみて物罷り聞えかはしつ打とけて遊びける中に、君は
色くるく衣もくろければ、今より「からす」とこそまをさめと言ひ
ければ、げによく我にはふきひたる名にこそと打笑ませ玉ひながら

いづこへも立ちてを行かむあすよりは鴉てふ名を人のつくれば

良寛

とのたまひければ

山がらす里にいゆかば子がらすもいざなひてゆけ羽よわくとも

貞心

御かへし

いざなひて行かば行かめど人の見てあやしめ見らばいかにしてまし

良寛

御かへし

鶯は鶯雀は雀さきはさぎ鳥はからす何かあやしき

貞心

日もくれぬれば宿りにかへり、又あすこそとはめとて

いざさらばわれはかへらむ君はここにいやすくいねよ早あすにせむ

良寛

あくる日はとくとひ來玉ひければ

歌やよまむ手毬やつかむ野にやいでむ君がなにくなして遊ばむ

貞心

御かへし

歌もよまむ手毬もつかむ野にも出む心ひとつをさだめかねつも

良寛

秋は必おのが庵をとふべしと契り玉ひしが、心地例ならねばし

ためらひてなど、せうそこたまはり

秋秋の花のさかりもすぎにけり契りし事もまだとけなくに

良寛

其後とはかく御心地さやぎ玉はず、冬になりてはたゞ御庵にのみこ
もらせ給ひて、人にたいめもむづかして、うちより戸ざしかため

てものし給へる山、人の語りければ、せうそこ奉るとて

そのまゝになほたへしのべ今さらにしばしの夢をいとふなよ君

貞心

と申し遣しければ、其後たまはりける竹葉はなくて

梓弓奉になりなば草の庵をとくとひてまし逢ひたきものを

良寛

かくてしはすの末つかた、俄に重らせ玉ふよし人のもとより知らせ

たりければ、打おどるきて急ぎまうでて見奉るに、さのみ憫ましき

御けしきにもあらず、床の上に座してゐたまへるが、おのがまゐり

しをうれしとやおもほしけん

いつく〜と待ちにし人は來たりたり今はあひ見て何か思はむ

良寛

むさしののくさばの露のながらへてながらへはつる身にしあらねば

良寛

かゝればひる夜、御片はらに在りて御ありさま見奉りぬるに、たゞ

目にそへてよわり行き玉ひぬれば、いかにせん、とてもかくても遠

からずかくれさせ玉ふらめと思ふにいとかなしくて

生き死にの界はなれて住む身にもさらぬ別れのあるぞ悲しき

貞心